

歌集
荒城

山本
剛

みづうみ叢書第三篇

山本剛（やまもと たけし）

「みづうみ」実生」編集同人

現代歌人協会会員

日本歌人クラブ埼玉県委員

埼玉県歌人会常任委員

浦和文芸家協会常任理事

浦和市文化団体連合会理事

埼玉県文化団体連合会評議員

埼玉文芸懇話会幹事

「埼玉春秋」編集委員

浦和市立領家公民館長

県公民館協会広報部長

著書

「藩風と古城」「徳川刑罰史」

「原子力の平和利用」

現住所

浦和市太田窪二一九一七

電話〇四八八・八五・五三二一

歌集^{わらき}荒城

みづうみ叢書第三篇

昭和五十年四月二十日 発行

定価二〇〇〇円

著者 山 本 剛

発行者 鬼 塚 萃

印刷所 東京出版印刷

発行所 謙 光 社

東京都豊島区要町一―五一

電話東京九五七―六七八九

振替口座東京四六二二五番

目次

第一部

勞逸日……セ

暖心 筆耕 四つの島 みどり児 木の
間の星 独坐 夜の蜘蛛 錦繡図 転進
危禍 朝の鏡 柿実れども 花樹の苗
母なき甥 同志健在 業忙 煩惱 塵の
世のそとに 仙人掌の鉢 歳旦茫々 盟
友 清杯 秋野と基地と 菩提 創生館
我執 休刊日旅行 それぞれの道

雪魔 静安の日 八月十五日 一束の反
古 太陽の塔の下 老松の枝 待つもの
福音 丹波栗

第二部

陸路海路……………七七

夏潮 古都素描 秩父行 富嶽 九州一
瞥 遠流の島 雪国の夏 血の花 天の
門 山壁 北信濃 白秋詩碑 利根川
城下町 過疎の国 北陸行 秩父羊山公
園 房総行 反射炉 霧が峯高原 蓼科
山 天竜川

第三部

晩暉……………一五

初心生涯 時の運 蟬鳴く 明治の書
団欒 体熱 小集団 地獄変 明治百
年 雨季 薔薇の棘 花の冠 錯鎌
凍土 誕生日 三月雪 「山猿記」に
題す 「母と子」 秋興 川沿ひの村
不老長寿 春思 年酒 某日 また某
日 協和 遺産 錠草 わが歳の豆
摂心 胸懷 地縁 儂 寒念佛

第四部

鬼哭……………三五

空明 慈勇居士 寂靜 殘影 酒徒昇天
蓮華 孤影 白哲 溫容 土手草枯る
善靈

跋 齊藤正二……………三三

後記……………三九

荒^{あら}

城^き

第一部

劳逸
日日

暖 心

「山青」出版東京記念会

五十過ぎわが編みし本憐れともおもふや人ら会堂に満つ
さまざまの人の眼のなか高き座につきてしばらく息を整ふ
座のもなか臉をとじぬ発言の短きひとつも覚えおかむと
諸方より届けられたる祝ひ酒拝がむ如くわれは受け飲む
すがすがと手渡されたる花の束いつ刻^{とき}見つむかすむ眼をもて
出版の費えをいとはざりし妻安らぎて欠伸やめず夜更けを

同じく甲府記念会

若き日のライバル老けてわれのためこの夜の集ひ企てくれぬ

取りあへばその掌たなごころやはらかく体ちひさくなりましし師よ 小沢義正氏

この師ひとり悪癖おほき少年のわれをやさしく導きくれし

七十の師の筆のあと墨の色濃く「峽中の春、山青し」

久しぶり地酒つぎつぎ注がれつつか口数多くなりゆく

卓かこむ人ら酔ひきてかぎりなく言葉投げあふ夜の更くるまで

この夜を辺りにひびかす高笑ひ久しくも吾は忘れぬしかも

両手もて戴く古硯かかるよき日のふたたびは来ざる思ひに

得がたきもの贈られぬまたひとつ債を重ねき拙なきわが身

暇あらば亡き先生の墓訪ねけふの想ひを告げたきものを 中村美穂氏

言ふべきを尽せずもろの思ひこめ頭を下ぐるひとびとの前

席上、殿岡牧太、北浦宏とともに「交流」発刊を議す

新しき計画告ぐれば友らの眼きらめきそそぐわが額のへに

遙かなる日の夢ひとつ髪うすくなりつつやうやく実らむとする

異変にあひし日も遠のきぬ息づきてわが身沈むる山の出湯に

山の端に照りいづる星数へつつ佇つ妻この夜なに思ひるむ

陽差つよく行手を照らす計画のひとつまとまり発つ故郷の町

筆耕

人厭ふとにはあらね一日の事を終ればまたひらく書を

ひと睡りすれば解ぐるる疲れともおもひつつもの書き励むこの夜も

書きあぐみ転臥すかたへ灰皿の煙ひとすじたち揺らぎつつ

書きものを続けて疼く指の先口あてて吸ふひとり湯ぶねに

誇り得べきもの何もなし老いづきしわが肘戴する机も古りて

霜こごる濡椽の芥いそがしく掃きだすいくどか嚏しながら

雨の降る夜のあたたかく隣家に赤児生れし話聞きをり

椿咲きつぎて明るき庭のうち塵吹きあぐる風の日ごとに

たんぽぽの苗束ねもつ同僚と連れだつ日暮れの街雨けぶる

煙草買ふ小銭たもとにして歩みゆく径のはた麦のび揃ふ

読書なかば灯消しぬ翌くる日のまた忙しき勤め思へば

膝さすりつつ杜甫詩など誦してゐし父おもはるる雨さむき夜を

四つの島

いよいよに狭き国ぬちに生きんといひがみあふさま生臭きまで

国際情勢の緊迫つぐる新聞のミダシ大きく浮きいで見え来

抗ふも従ふもならぬか東西より強きものの手ともに伸びきて

小さくとも独りたつべきわれらの邦ただに平和を守るほかなし

こころ刺すことのみ多しひそやかに老ひゆかむ日を願ひてをるに

同胞の血しほ益なく流しつつ基地をめぐる悲劇もつきず

通りゆく墓地夕ちかく年ふりし権時じくに落葉を降らす

兵籍を刻みたる墓ながめつつ立つ足のもと藪蚊鳴きよる

国の歴史おほくは悲し墓原にひととき夕の光あまねく

あはれわが身砕かれはてぬとどろとどろ寄せたる時の勢ひの前に
権力に抗ひてかの日からむりし痕あといまだ消えず疼くを
突き進み突きすすみ命かえりみず学徒動員の時さながらに
学生ら目覚めよ暴に暴をもてむかふ闘ひ勝つべくもなし
テロリズム絶えざる国かひえびえと腋出づる汗ぬぐふ夜ふけを

みどり児

出産の報らせつぎつぎわが庭の小池の水のぬるみくる日を
初孫に男児得たりと唾とばしつつ嬉しげに語る人はや
鯉幟ひるがへり立つ赤ン坊を借りてわが抱く庭青葉して
五月空明るく鯉幟垂れきたり花咲く藤の棚に絡まる

矢車の回りにぶれる午の空ひらひらと白き蝶舞ひのぼる

お祝ひの産衣縫ひあるわが妻の面おもて和らぐ春の灯のもと

名づけ親となりし子どもら数へつつ眠りにおつるとき他愛なく

はしけやし祖父ぢぢの如くにながめゐる赤ん坊あまく乳のにほひて

わがつけし子の名は岳人たけひと膝のうへに跳ねうごく肢力ましきぬ

慾のなきこと言ひあひてながつゆの夜ふけを妻とすする熱き茶

木の間の星

楽譜かかへしとなりの少女霜がれてくろずむ檜葉垣のそと通りゆく

やはらかく闇こもる坂木々の間の星くずひとつづつ瞬きて

裏道を通りて眼の治療受けにゆく午すぎけふも旋風つじかぜたつ